

1. 調査研究のテーマ、概要

調査研究のテーマ

共生社会の実現に主体的に取り組む実践力の育成

○調査研究のテーマを設定した目的

研究指定校の人権教育目標として、「人権基本方針に基づき、人権尊重の理念に対する理解を深め、生命の尊重を基盤に、自他に対する肯定的な態度と共生社会の実現に主体的に取り組む実践力を育成する。また、学校教育のあらゆる場において、生徒一人一人を大切に、愛情ある指導を通して、生徒の中に広く生命と人権を尊重する態度を育てる」を掲げている。コロナ禍の中、学校行事や部活動などの制限もあり、人間関係構築や意思疎通に不自由を感じている生徒も少なくない。コミュニケーション不足、自己肯定感が低いなどの現状を踏まえ、自他に対する肯定的な態度と共生社会の実現に主体的に取り組む実践力を育成することが大きな課題となっている。

そこで、変化の激しい時代において、社会を生き抜くためのキーワードを「多様性」「共生」「想定外」と考え、3年前から様々な取組を行ってきた。例えば、年間を通じて教職員の人権意識と指導力の向上のために、県教委人権教育課指導主事や弁護士による教員研修を実施したり、男女共同参画を推進するために校内組織や校務分掌、組織体制を見直したりしてきた。また、「子供、女性、性的指向・性自認」の人権課題に重点をおき、生徒が自己肯定感やコミュニケーション技能を高めるために、講演会を実施したり、学年に応じて体験的な学習を取り入れたりしながら人権学習を展開してきた。さらに、生徒とともにいじめ基本方針の改善や校則の見直しを行ってきた。令和4年11月には、「グラデュエーション・ポリシー」（本校の育成をめざす資質・能力に関する方針）を定め、「自他の生命や人権を尊重し、多文化共生社会の実現に向け豊かな人間関係を構築できる生徒を育成する」ことを学校全体で共通理解を図り、取り組みを進めている。

これまでの取組を基盤にして、人権課題である「アイヌの人々、子供、女性、外国人」に主軸をおき、特別活動や総合的な探究の時間を中心に、教育活動全体を通じて取り組む計画を立てた。特に、アイヌの人々については、文化や歴史、現在進められている取組等、体験的な学習を設定し、生徒が主体的に取り組む、正しい知識を得ながら生徒同士で考え議論できるよう計画している。また、女性についての人権学習を通じて、男女間の固定役割分担意識が一人ひとりの生き方を狭めている状況を実感させ、自らの特性を見つめ直し、主体的な進路決定や将来設計に繋げていく。さらに、それぞれの学習過程において、学んだ内容を振り返り、学習発表会等で発信することを通して自己肯定感を高めていく。

このように、生徒が主体的に考え、学びを深めることを通して、自分事として捉え、多

様性を認め合う態度を培い、共生社会の実現に主体的に取り組む実践力を育成することを目指し、テーマを設定した。

○調査研究の概要

各教科や学校行事等を通じて「共生社会の実現に主体的に取り組む実践力の育成」、具体的には、「自他の生命や人権を尊重し、多文化共生社会の実現に向け豊かな人間関係を構築できる生徒を育成する」ことを目指す。そのために、学習を展開する際には、体験的・協働的な活動を盛り込む。また、振り返りや発表の機会を設け、学校ホームページ・年次通信などを通じて家庭や地域へと発信を行う。生徒の実践力が育成できたかを検証するため、アンケートやワークシート等の分析を行い、人権教育を通じて育てたい資質・能力の知識的側面、価値的・態度的側面、技能的側面についての評価を行う。

2. 基本情報

研究指定校の概要

○学校名

兵庫県立姫路東高等学校

○これまでの研究指定等の状況

なし

○学級数

21 学級

○児童生徒数 (R.5.1.10)

全生徒数：827 名

○URL

<https://www.hyogo-c.ed.jp/~himehigashi-hs>

○指定理由

指定校は、教育活動全般を通して、自己や他者理解につながる体験的な活動や協働的なグループ活動等を行い、学習した内容をまとめ、発信する。自己肯定感を向上させ、自他の生命や人権を尊重し、多文化共生社会の実現に向け、豊かな人間関係を構築できる主体的な生徒の育成を研究目的としている。また、文部科学省スーパーサイエンスハイスクール指定を受け、探究活動を充実させ、課題研究の成果発表等を通して、生徒の主体性や協働性を高める取組を実践している。さらに、地域活性のため、ふるさと貢献事業を積極的に行うなど、地域連携を大切にしながら、人との関わりの中で、自らの課題を発見し、主体的に解決できるよう学習を展開している。「アイヌの人々」の歴史や文化等について体験的に学ぶため、修学旅行は目的地を北海道に設定した。実施に関しては、事前及び事後学習を充実させ、共生社会の実現に向けた態度を育成しようと計画している。そこで、これまでの取組を素地として、自他を尊重する態度や共生社会の実現に主体的に取り組む実践力の育成を目的とした研究視点を加味して教育活動を行うことは、指定校における人権教育の発展につながると考えられる。体験的、協働的な学習手法を用い、自己や他者理解を深め、多様性を認め合う態度を培い、共生社会の実現につながる指定校の実践研究は、指定校の地域だけでなく、兵庫県における人権教育を推進する上で大変有益なものであると考える。

○取り組んだ人権課題について

該当するものに○印、最も主要な人権課題1つに◎印を付与

①子供	○
②女性	○
③高齢者	
④障害者	
⑤同和問題	
⑥アイヌの人々	◎
⑦外国人	○
⑧-1 HIV 感染者等	
⑧-2 ハンセン病患者等	
⑨刑を終えて出所した人	
⑩犯罪被害者等	
⑪インターネットによる人権侵害	
⑫北朝鮮当局による拉致問題等	
⑬性的指向、性自認	
⑭その他 ()	

3. 調査研究の内容等

○調査研究の内容

本研究では、「アイヌの人々」、「女性」、「子供」、「外国人」のテーマについて参加型、体験型の学習を行い、また協働的な活動を通して多様性を認め合う態度を培い、共生社会の実現に主体的に取り組む実践力の育成に繋がるとの仮説のもと、以下のような実施方法で研究を進めた。

○実施方法

年度当初に「アイヌの人々」、「女性」、「子供」、「外国人」について生徒アンケートなどを活用し、実態把握を行った。それをもとに、人権教育委員会（専門部1名、各年次団2名、年次外1名）を開き、年間計画をたてた。各人権課題について、以下のような実施方法を行った。

「アイヌの人々」について

(i) 修学旅行事前指導 6/19 人権 HR

テーマ 「守り、伝え、共に生きる」高校生用教育資料『HUMAN LIGHTS』より
目的 アイヌ民族の文化、差別の現状について学ぶ
概要 高校生用教育資料『HUMAN LIGHTS』第2部-6「守り、伝え、共に生きる」を活用し、アイヌの人々について、先住民族であることや、偏見や差別の歴史的経緯・実態等に関する正しい認識を学んだ。グループワークや 討論や発表を通して、すべての民族が尊重されるべき権利を有していることを理解するとともに、多様性を尊重した共生社会づくりに考えた。

(ii) 修学旅行 ウポポイ見学に向けて

テーマ 「国立アイヌ民族博物館訪問（ウポポイ）見学」
目的 共生社会実現に向けて具体的に何をすべきかを考える。
概要 グループワークを通して、以下の①～⑤に取り組んだ。
①アイヌ語の意味を調べてみよう ②アイヌ民族の視点による「6つのテーマ展示」から学んでみよう ③伝統的コタンで体感してみよう ④感想 ⑤人権学習について
（※事前指導からウポポイ見学までにおける意識の変化についての簡易なアンケート）

(iii) 修学旅行事後指導 1/25 人権 HR

テーマ 「共生社会実現における現代の課題」
目的 共生社会実現のために何ができるのか考え、行動する態度の育成
概要 6月の事前指導からウポポイ見学後までの一連の学習を通して得た気づきや自身の認識の変化などについて改めて言語化し、班で共有させた。また、共生社会実現における現代の課題について調べさせ、「アイヌの人々」だけでなく「民族問題」「共

生社会」「多様性」などをキーワードとする意見交換を行わせた。

(iv) 人権学習講演会 2/8 人権 HR

テーマ 「共生社会実現に向けて具体的に何をすべきか」

目的 共生社会実現のために何ができるのか考え、行動する態度の育成

概要 アイヌ民族文化財団のアドバイザーである宇佐照代氏を招聘し、講演会を実施した。地名や動物名に見られるアイヌ語や衣食住の文化の実情、病床の祖母の言葉によって民族への意識を喚起されたとする自身の経験、ウポポイがテーマパークのようにも見えてしまうことへの危惧、遺骨返還問題に対する見解などが語られた他、口琴の一種であるムックリの実演も行われた。

「女性」について

(i) 上野千鶴子講演会

テーマ 「問いの立て方」について学び、情報生産者になる

目的 ジェンダーについての知的理解と人権感覚の涵養

概要 第1～3回は「ジェンダー」に焦点を当てて代表生徒が探究した発表を元に、上野さんとの対話を全校生徒が視聴するという形式を取った。第4回は著書『情報生産者になる』を元に、代表生徒が立てた「問い」と「研究計画書」についてご指導頂いた。毎年、新たな視点と激励を楽しみにしている生徒が多い行事である。

▶ 代表生徒「問い」の例

「異性間の友情について、世代別で考え方はどのように異なるのだろうか」

「播州弁でのコミュニケーションはジェンダーニュートラルか」など

(ii) 姫路市男女共同参画センター「あいめっせ」との連携し、ジェンダーやフェミニズムについて学び、学校外での活動を経験できた。

「子供」について

(i) 1年次人権講演会 …特定非営利活動法人SEAN理事長 小川 真知子さん

テーマ 「共に支えあう社会の実現のために知っておかなければならないこと」～セクハラ・パワハラ・デートDVについて～

目的 現代社会におけるセクハラ・パワハラについての知識を深め、その対応方法を学ぶ。

概要 パワーポイントを見ながら、子どもの人権やセクハラ・パワハラ等に関する定義や法律、現状を聞いた。講演会終了後には質疑応答時間を取り、生徒が個別に講師と直接質疑応答できるようにした。講師との距離が近く、具体的な例も挙げられており生徒たちは自分事として捉えられたようであった。

(ii) 1・2年次人権講演会 …臨床心理士、前兵庫県臨床心理士会会長 羽下大信さん

テーマ 「自己を知る」「人権意識の高揚」

目的 自己のアイデンティティについて考え、自己認識を深める機会にする。お互いを語り合うことで、共生社会のあり方についての認識を深める。

概要 「プロの写真家が撮影した、生徒たちと同年代の若者の写真を見て、その人物の様子や背景からイメージしたことを発表する。」というグループワークを行った。自分がイメージしたことを自由にクラスメイトと交換すること、また写真の被写体のインタビューを聞くことで、他人と自身との価値観や認識方法の違いを実感することができた。臨床心理による語り口、教員とは違う視点を持つ大人のリードによるワークを行うことで、生徒同士の率直な意見交換につながった。

(iii) 4年前から校則について見直しを始めた。生徒会を中心に、ルールや制度改定、校内環境改善を生徒総会等で手順を踏みながら進めることを経験できた。

「外国人」について

(i) 1年次人権講演会 …本校教諭 Henriksen Jovald

テーマ 「キャリア形成について」

目的 講話を聞き、自身の将来(キャリア)に対する展望を持ち今後の学びに対する意欲を向上させる。

概要 本教諭の生い立ちから現在に至るまでの経験談を、はじめは英語スピーチで聴き、その後日本語スピーチで確認した。彼は南アフリカ出身で、ドイツやアルゼンチンなどでも就労経験をもち、言語習得や進路選択の場面で、どのような展望を持ってキャリアを形成してきたのかをディスカッションを交えながら話した。その後、グループで感想や意見交換を行った。

(ii) 本校には外国人生徒等や帰国子女が複数在籍している。また、外国籍英語科教諭1名、英語補助教員(ALT)が2名、外国籍の実習助手が勤務している。昼休みを利用したイングリッシュカフェやハロウィンなどのイベントを開催し、異文化交流を体験できた。また、今年度は4回の海外研修や、オーストラリアの高校生との定期的な動画交流など異文化交流を実施した。多様な価値観を日常生活の中で経験できた。

4. 検証・評価・改善・普及

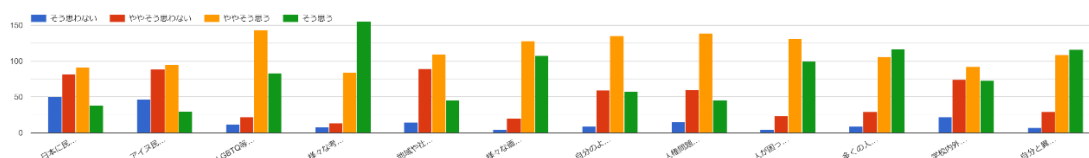
「人権意識アンケート」による人権意識の変容分析

質問項目（「そう思わない」「ややそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」の4段階で回答）

- ① 日本に民族問題があると思いますか。
- ② アイヌ民族の文化・伝統を知っていますか。
- ③ LGBTQ等、ジェンダー問題について知っていますか。
- ④ 様々な考えをもつ人々と暮らしていることを理解していますか。
- ⑤ 地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えたことがありますか。
- ⑥ 様々な価値観を尊重しようとする態度を身につけていますか。
- ⑦ 自分のよいところがわかり、自分を大切にしていますか。
- ⑧ 人権問題を解消するために行動しようと思いませんか。
- ⑨ 人が困っているときは、進んで助けていますか。
- ⑩ 多くの人々と協力して行動することができますか。
- ⑪ 学校内外の活動に参加し、人の役に立った経験がありますか。
- ⑫ 自分と異なる価値観を持つ人々と関わることができますか。

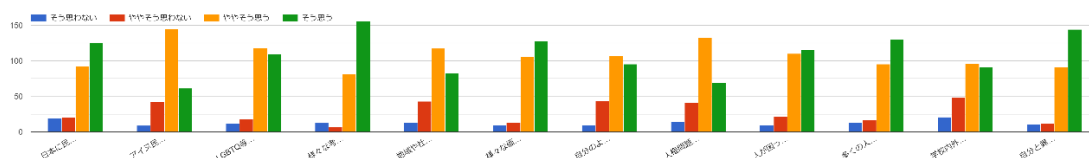
2年次 アンケート結果 ※ 重点課題「アイヌの人々」に取り組んだ2年次の人権意識の変容分析

2年次 5月（回答数261）



2年次 2月（回答数258）

以下の質問に全く回答しなく下さい。



・そう思う（緑）、ややそう思う（黄）、ややそう思わない（赤）、そう思わない（青）
 ・「①日本に民族問題があると思いますか」「②アイヌ民族の文化・伝統を知っていますか」において「そう思う」「ややそう思う」が増加した。修学旅行を通して学習した「アイヌの人々」についての理解が進んだように見られる。また⑥～⑫のアンケートでも同様の傾向がみられ、自己肯定感の向上や他者理解・共生の心の育成が進んだ。

・今年度の取り組みでは、多くの人権問題について知ることができた。しかし、その問題を知った後、解決に向けてどう行動するかが今後の課題である。「⑤地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えたことがありますか」「⑧人権問題を解消するために行動しようと思いますか」で「そう思う」が増えるよう、多様な生き方の中から自らの生き方を考えられるように取り組みたい。

人権図書の活用

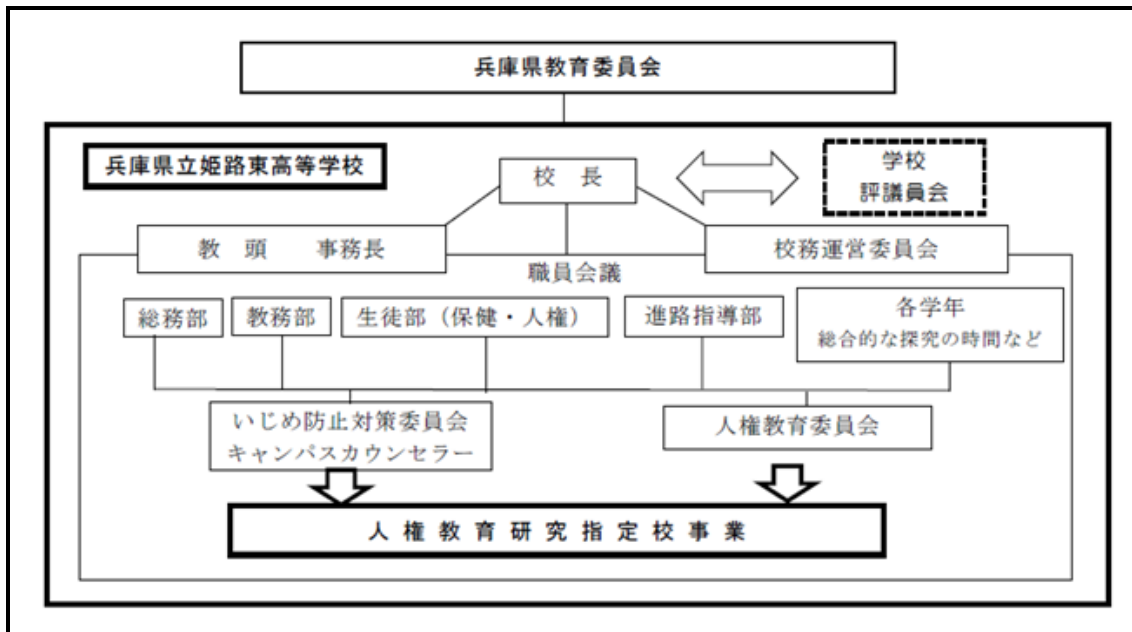
・目的は今年度取り組んできた人権課題「アイヌ」「女性」「子ども」「外国人」について、さらに考えを深め、知識を補足するため、図書室とは別に、人権関連図書のみを集めたコーナー(本棚)を、生徒・教師の両方が利用しやすいよう職員室前に設置した。

・専門的なものから漫画まで幅広い書籍を用意することで、それぞれに合ったレベルで知識を深められるようにした。また、DVD も用意してあるので、今後の人権 LHR での活用が期待される。

5. 人権教育に係る年間指導計画

時 期	内 容	備 考
4～5月	人権ホームルームや講演会等の年間行事の検討 人権意識調査 教職員人権研修(インクルーシブ教育)	人権教育委員会、全年次 生徒部、委員会
6～7月	上野千鶴子さんによるワークショップ、講演会 NPO 法人 SEAN との連携、ワークショップの実施 いじめアンケートの実施 海外オンライン交流会 (オーストラリア コルベ カリック カレッジ)	委員会、生徒部、各年次 希望者
8月	NPO 法人 SEAN との連携、ワークショップの実施 アイヌについての調べ学習 教職員人権研修(カウンセリングマインド)	委員会、1年次 教科学習、2年次 生徒部、委員会
9～12月	長期休業中の服装についてアンケートの実施 修学旅行事前指導 修学旅行 人権ホームルームの実施と振り返り いじめアンケートの実施	人権教育委員会、 生徒部、各年次 いじめ防止対策委員会
1～3月	修学旅行事後指導(LHR)、修学旅行事後指導(講演会) 人権意識調査、いじめアンケートの実施 今年度の総括と来年度計画の検討	教科学習、各年次 人権教育委員会、生徒部、 いじめ防止対策委員会

6. 推進体制（都道府県・指定都市教育委員会を含む）



○関連資料

令和5年度77回生人権ホームルーム学習指導案

1. 日 時 令和5年6月19日(月)2校時
2. 学 級 普通科2年3組 32名(2-3HR教室)
3. 単 元 名 「守り、伝え、共に生きる」(人権課題:アイヌの人々)
高校生用教育資料『HUMAN RIGHTS』第2部-6(兵庫県教育委員会)
4. 単元設定の理由
 - (1) 教材観
国連では、世界の先住民族が失った権利をどのようにして回復するかについて、長年、検討が進められてきた。そういった国際情勢において、日本でも、平成20年、国会においてアイヌ民族が「先住民族」であることが公式に認められ、令和元年5月、アイヌ民族支援法が施行されるに至っている。このように多様性を認める社会の形成に伴い、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、日本の先住民族であるアイヌについて学習する。民族・文化の違いを理解することは、自らの価値観を形成するとともに他者の価値観を尊重することができる人間性の涵養に繋がる。
本校の77回生は、2年次の修学旅行で北海道へ訪れる予定であり、行程には国立アイヌ民族博物館での研修も計画されている。その事前学習としても、学習すべき題材である。また、教材としては、兵庫県教育委員会作成の高校生用教育資料『HUMAN RIGHTS -いま 私がひらく 未来-』を活用する。
 - (2) 生徒観
明るく積極的で、真面目な生徒が多く、意見交換がよくできるクラスである。ペアワークやグループワークにも意欲的に取り組むことができ、他者の意見を傾聴できる生徒も多い。
 - (3) 方法観
個人ワーク、ペアワーク、グループワークを段階的に取り入れ、自己の考え方の形成と他者の考え方の理解を促す。また、異文化理解を自分事として捉えられるように、身近で視覚的な資料を活用する。
5. 指導計画(計4時間)
 - 1・2時間目 事前学習(校内)・・・(本時はそのうちの1時間目)
 - 3時間目 実地研修(国立アイヌ民族博物館訪問)
 - 4時間目 事後指導(校内)
6. 単元目標(本時の目標)
 - (1). アイヌの人々について、先住民族であることや、偏見や差別の歴史的経緯・実態等に関する正しい認識をもつ。
 - (2). アイヌの人々の文化や尊厳を尊重するとともに、アイヌの人々に対する差別をなくそうとする意欲・態度を身につける。
 - (3). 「アイヌ民族」としてのアイデンティティに関する葛藤や、アイヌの人々の文化や権利を復興し継承していこうという動きを共感的に理解する。
 - (4). 「先住民族の権利に関する国際連合宣言」等、先住民族の尊厳を取り戻そうとする国内外の動向を知ることから、すべての民族が尊重されるべき権利を有していることを理解するとともに、多様性を尊重した共生社会づくりに向けた意欲や態度を身につける。
7. 指導上の留意点
 - (1). 民族の文化や尊厳を尊重することで、多様性を尊重した社会を強調する。
 - (2). 人・モノ・情報の移動が容易になったことで、国境という概念が希薄になっており、様々な文化・人種が混在しているというグローバル化の視点を取り入れる。

8. 使用する教材

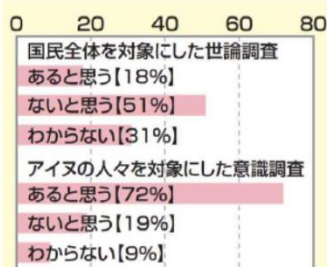
・高校生用教育資料『HUMAN RIGHTS』第2部-6「守り、伝え、共に生きる」

9. 展 開

時間	学 習 活 動	指導上の留意点・使用する資料
導入 10分	1. アイヌ語が語源となっている言葉や、アイヌの文化、歴史的経緯について紹介する。 資料配付「守り、伝え、共に生きる」	・生徒の挙げた事項に触れながら、アイヌ民族が日本の先住民族であるということや、歴史的背景を確認させる。
展開① 10分	2. 個人で考えてワークシートに記入し、ペアやグループで共有する。 資料配付「授業資料①」	・参考資料等から差別の実態を認識させ、それらに対する不安が理由として考えられることに気づかせる。
	瑞希さんが、アイヌであることが言えずに、ビクビクしていたのはなぜだろうか。	
	アイヌの人々に対する差別や偏見について、「あると思う」と回答した割合が、国民全体では18%、アイヌの人々では72%と大きく差がある理由は何だろうか。	・差別が残っていること、それによってアイヌの人々がアイヌであることをネガティブなものと感じてしまっている可能性を理解させる。
	瑞希さんが自分のルーツであるアイヌの言葉を前向きに捉えられるようになったのはなぜだろうか。	
展開② 15分	3. 個人で考えてワークシートに記入し、ペアやグループで共有する。	・マオリなどの偏見や差別を乗り越えて肯定的に捉えている事例を紹介する。先住民族の権利にも触れる。 ・文化の良さを学ぶ、多様な文化を尊重し合うなど、周囲の理解が大きいことにも気づかせる。
	多様性を認めていくために、自分たちにもできることは何だろうか。	
展開③ 10分	4. 個人で考えてワークシートに記入し、ペアやグループで共有する。	・アイヌ民族やその文化等多様な文化について理解を深めさせる。 ・自他を尊重しようという意欲や態度について振り返らせる。 ・グローバル化の視点から、人・モノ・情報などがより自由に動き、多様性のある社会というのが当たり前になっていることを捉える。
まとめ 5分	5. 今日の授業をふり返り、気づいたことや考えたことを記入する。	

資料 I

○ アイヌの人々に対する差別や偏見について
「現在、アイヌの人々に対する差別や偏見があると思うか」



「どのような場面でどのような差別を受けたか」

- ・ アイヌであることが分かったら無視され、アイヌの子と遊んじやいけないと仲間外れにされた。
- ・ 雇用の際にアイヌであることを理由に雇用を見送られた。
- ・ 姉しゅうめに家柄・出自の違いを指摘され、さげすまれた。

(出典：内閣官房・内閣府「国民のアイヌに対する理解度に関する調査」、平成 28(2016)年)

資料 II

アイヌの権利を求めて

アイヌの「先住権」求め初の提訴

令和 2(2020)年 8 月 17 日、北海道浦幌町のアイヌの人々の団体が、生活のためにサケをとることは、「先住民族の権利に関する国連宣言」が認める「先住権」に当たり、それはサケ漁を禁じる法律や道規則が適用されるものではないことの確認を国と道に求め提訴しました。「先住権」の確認を求める初の裁判となりました。

アイヌの遺骨返還訴訟

アイヌの人々の人骨は、古くから人類学等の研究対象とされてきました。明治中頃には、日本人の起源をめぐる研究が盛んになり、学者たちはアイヌコタン（地域集団）の墓地から大量の遺骨を掘り出し持ち去りました。

平成 24(2012)年には、アイヌの人たちが、北海道大学からの遺骨返還を求める訴訟を起こしました。その後、遺骨を保管している大学に対して同様の訴訟が道内数カ所で起こり、和解も進んできましたが、まだ未解決のところもあります。現在は、「民族共生象徴空間」(ウポポイ)の慰霊施設に1200体を超える遺骨が納められています。国、アイヌの人々双方が、遺族や地域への遺骨返還を目指しています。

○キーワード

◆ アイヌと和人

「アイヌ」とはアイヌ語で「人間」の意味。かつて差別的に使われていたこともあり、アイヌの人々をさす言葉としては、「アイヌの人々」や「アイヌ民族」を使う。

「和人」とは、明治以前においては、本州から渡来してきた人々をいい、現在は、日本の中で一番人数の多い人々を、アイヌの人たちと並べて呼ぶときの呼び名である。アイヌ語では「隣人」を意味する「シサム」という。

◆ アイヌ同化政策

19 世紀半ばごろから明治政府によって実施された、アイヌ民族に和人と同じ生活様式を強いた政策。学校でも日本語での教育が行われ、アイヌ語は学校で禁止され、家庭でも伝承されず衰退していった。和人によるアイヌ民族へ偏見や差別も強まり、アイヌ文化は深刻な打撃を受けた。

◆ アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律(アイヌ施策推進法、令和元(2019)年)

文化振興に特化したアイヌ文化振興法(平成9(1997)年)に代わり施行された法律。アイヌ民族を「先住民族」と初めて明記し、先住民族の権利への配慮や民族共生象徴空間(ウポポイ)による地域振興、文化復興を目的としている。



○ 関係機関・施設等

◆ (公財)アイヌ民族文化財団



資料 III

◇ 先住民族の権利に関する国際連合宣言(平成19(2007)年国連採択)

先住民族について、「植民地化とその土地、領域および資源の奪取の結果、歴史的な不正義に苦しんできた」とし、先住民族の制度、文化、伝統、固有の生活様式を守る権利のほか、政治的地位や経済的・社会的・文化的発展についての自己決定権を強調しています。また、先住民族に対する差別を禁止しています。

[ワークシート]

守り、伝え、共に生きる

____年 ____組 ____番 名前 _____

1. 織田瑞希さんに関する文章を読み、瑞希さんがアイヌであることが言えずに、ビクビクしていたのはなぜか考えて記入しよう。

2. アイヌの人々に対する差別や偏見について、「あると思う」と回答した割合が、国民全体では18%、アイヌの人々では72%と大きく差がある理由は何だろうか。

3. 瑞希さんが自分のルーツであるアイヌの言葉を前向きに捉えられるようになったのはなぜだろうか。

4. 多様性を認めていくために、自分たちにもできることは何だろうか。

5. この時間の感想を書こう。